

## 寄稿論文

# 専門用語におけるアルファベット語の増加 —『現代用語の基礎知識』にみる—

The Increase of Alphabetical Words in Japanese Terminology  
: The Inquiry of "Gendai Yoogono Kiso Chishiki  
(Basic Knowledge of Contemporary Words)"

塩田 雄大  
NHK放送文化研究所

コンピューター関連術語の語種構成について、『現代用語の基礎知識』(1985, 1990, 1995, 2000)を資料として比較してみたところ、以下の点が明らかになった。

- (1)カタカナ表記の外来語は、一貫して優位にある。
- (2)漢語は、減りつつある。
- (3)近年では、アルファベット表記の外来語が増えつつある。

このことは、造語にあたっての命名法が「ユーザー本位」から「メーカー本位」にシフトしつつあることを示唆するものである。造語を担う者としては、「専門家むけ語形」のみならず「一般むけ語形」も場合によっては考えておく必要があることを指摘する。

## はじめに

日本語の語彙を「語種」という観点から見ると、和語・漢語・外来語、およびそれらからなる混種語、という類別をすることができる。日本語の基礎的・基本的な語彙の構成としては、和語が中心的な部分を成し、漢語がその次の位置を占め、外来語は周辺的な存在にとどまっている。いっぽう専門用語には、和語が少なく、漢語が多く、また近年では外来語が増えつつあることがこれまでに報告されている。専門用語の造語にあたって、基礎的・基本的な形態素または単語を用いずに、使用頻度の低い漢語・外来語を多用することが、一般の人にとって専門用語を「理解しにくいもの」にしていると言えるだろう。有名な先行研究であるが、各言語における「物理学用語」が、各言語における「基本語」とどれくらい隔たっているかを計算したところ、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・日本語の順に「隔たり度」が高い、という結果

が得られている（国立国語研究所（1981））。つまり、少なくとも物理学用語に関しては、日本語は他の4言語にくらべて「ふだんの生活ではあまり使わないことば」をより多く用いることが多い、ということである。この「ふだんの生活ではあまり使わないことば」というものの大半は漢語・外来語である。

ただし漢語を用いた造語は、明治時代には圧倒的に多かったが、大正・昭和時代になると、外来語の力がかなり強くなってくる（宮島（1967））。

現代の外来語を表記の面から大別すると、「コンテンツ」のようにカタカナで書くものと、「NGO」「PTSD」や「check」のようにアルファベットを用いたものがある。前者を「カタカナ語」、後者を「アルファベット語」と呼ぶことができる。

筆者は、近年における外来語のなかでも、アルファベット語の増加がとりわけ著しいのではないか、と考えている。本稿は、コンピューター関連術語を材料として、このことに

に関する動きを観察しようとするものである。

## 1 調査手順

### 1.1 調査対象と語種別分類

調査対象は、以下の資料である。

『現代用語の基礎知識』(1985, 1990, 1995, 2000) 自由国民社

この資料から、コンピューターに関する術語(『現代用語の基礎知識』の分類では「電子工学用語」「情報化社会用語」など)を抽出し、各項目を語種別に分類する。なお和語については、コンピューター術語として使われることが非常に少ないため、主な分析の過程ではカウント結果を示さないことにする。また、「アルファベット語の増加」ということに注目するため、やや変則的ではあるがここでは「カタカナ語」と「アルファベット語」とを「別語種」として扱うことをご理解いただきたい。

まとめると、本稿で便宜的に取り上げる語種は、「漢語」「カタカナ語」「アルファベット語」の3種類である。

なおコンピューター関連術語を調べるのに、専門のコンピューター術語集ではなく『現代用語の基礎知識』をあえて材料にする理由は、「一般社会への影響」を考えるためにある。専門のコンピューター術語集はあくまで専門家むけのものであり、専門家集団内で用いられることが収録されていると言える。一方で『現代用語の基礎知識』は、今まさに「専門用語」から「一般用語」にも広がろうとしているタイムリーなことばを収録しており、今後の日本語のありかたを考える際の資料として大変有効である。

### 1.2 第一段階（単一語種別分類）

第一段階として、单一の語種のみから構成される項目を取り上げて考察する（混種語を含めた考察は次項でおこなう）。ここでは「カタカナ語」と「アルファベット語」とを便宜的に別語種とみなすため、この両語種の語から構成されている複合語（例えば「I Cカード」など）は混種語ということになり、この

段階では扱われない。

また、1つの項目に対して、語種の異なる複数の術語が示されていることがある。

例 多重処理（マルチプロセシング）  
サイバネティクス（人工頭脳学）

こういった項目（=複数術語立項項目）は、この段階ではいったん除外して考える（これらを含めた考察は次項でおこなう）。

まとめると、この段階で扱う語種は、「純漢語」「純カタカナ語」「純アルファベット語」の3種類となる。

### 1.3 第二段階（語種要素別分類）

第二段階として、1.2では除外した混種語や複数術語立項項目も含めて考察する。基本的な考え方としては、「漢語を含んだ項目」「カタカナ語を含んだ項目」「アルファベット語を含んだ項目」の3つの観点から分類をおこなう。

なお複数術語立項項目については、最初に掲げられているものが推奨語形、カッコ内のものは容認語形である、という考え方もあるかもしれない。その場合には、両形を対等に扱うのはふさわしくないだろう。しかしここでは、各項目においてそれぞれの語種が（形態素としての使用も含め）どのくらい現れるか、ということを調べるのが主目的であるため、一律に扱うこととする。

例 情報検索：「漢語を含んだ項目」として  
1 カウント

エレクトロニック・バンキング  
：「カタカナ語を含んだ項目」として 1 カウント

O C R :「アルファベット語を含んだ項目」として 1 カウント

磁気ディスク装置  
：「漢語を含んだ項目」として 1 カウント  
「カタカナ語を含んだ項目」として 1 カウント

双向 C A T V  
：「漢語を含んだ項目」として

1 カウント 「アルファベット語を含んだ 項目」として 1 カウント	「アルファベット語を含んだ 項目」として 1 カウント
非ノイマン型 L S I :「漢語を含んだ項目」として 1 カウント	多重処理 (マルチプロセシング) :「漢語を含んだ項目」として 1 カウント
「カタカナ語を含んだ項目」 として 1 カウント	「カタカナ語を含んだ項目」 として 1 カウント

## 2 調査結果と考察

調査対象とした『現代用語の基礎知識』からは、それぞれ以下の項目数が得られた。

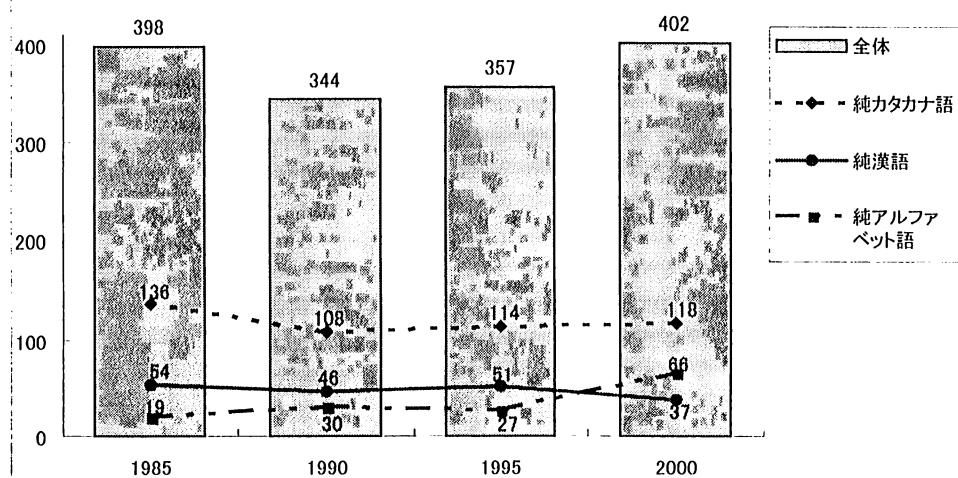
	1985	1990	1995	2000	
	398	344	357	402	(項目)

### 2.1 第一段階の調査結果と考察

以下のような結果が得られた（表1・図1）。

	1985	1990	1995	2000
全件	398	344	357	402
純漢語	54 (13.6%)	46 (13.4)	51 (14.3)	37 (9.2)
純カタカナ語	136 (34.1)	108 (31.4)	114 (31.9)	118 (29.4)
純アルファベット語	19 (4.8)	30 (8.7)	27 (7.6)	66 (16.4)

図1 コンピューター関連術語の語種(単一語種のみ)



のことから、次の点が指摘できる。

单一の語種からなるコンピューター関連術語については、

(1)1985・1990・1995・2000 年版の各時期を通して、純カタカナ語の占める割合が最も多

い。

(2)2 番目に多いのは、1995 年版までは純漢語である。

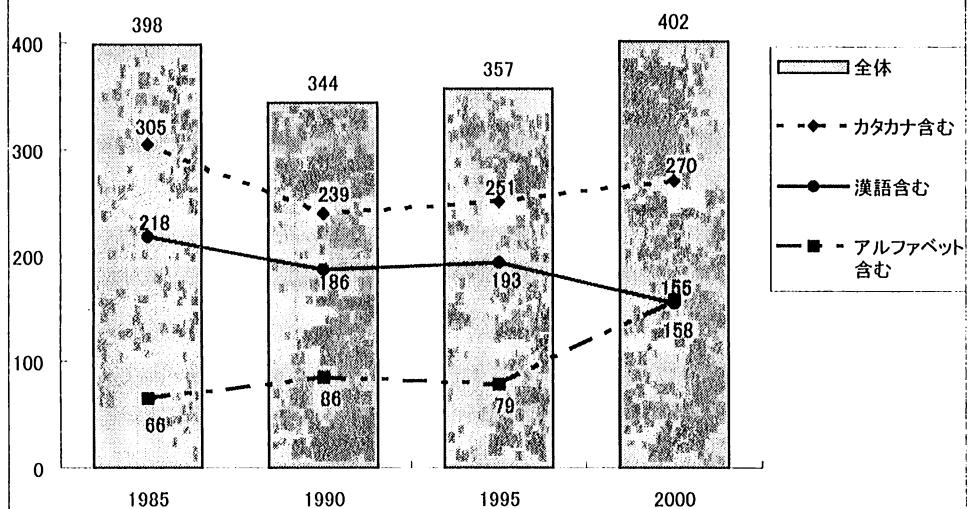
(3)しかし 2000 年版になると 2 番目と 3 番目とが逆転し、純アルファベット語の占める割合が純漢語よりも多くなる。

## 2.2 第二段階の調査結果と考察

以下のような結果が得られた（表 2・図 2）。

	1985	1990	1995	2000
全件	398	344	357	402
漢語含む	218 (54.8%)	186 (54.1)	193 (54.1)	155 (38.6)
カタカナ語含む	305 (76.6)	239 (69.5)	251 (70.3)	270 (67.2)
アルファベット語含む	66 (16.6)	86 (25.0)	79 (22.1)	158 (39.3)

図2 コンピュータ関連術語の語種(語種要素)



のことから、次の点が指摘できる。

コンピューター関連術語について、混種語や複数術語立項項目もあわせて考えた場合、

(1)1985・1990・1995・2000 年版の各時期を通して、カタカナ語を含んでいる項目の占める割合が最も多い。

(2)2 番目に多いのは、1995 年版までは漢語を含んでいる項目である。

(3)しかし 2000 年版になるとアルファベット

語を含んでいる項目の割合が激増し、漢語を含んでいる項目とほぼ同じ割合になる。

## 2.3 両段階を通した考察

2.1 と 2.2 の結果から、コンピューター関連術語におけるカタカナ語の継続的優位と、アルファベット語の増加、また漢語の減少が明らかになった。

また 2000 年版では、2.1 の段階ではアルファベット語の位置が漢語に逆転した形になっ

ているが、2.2 ではほぼ同率である。これは、漢語だけで構成されている術語(=2.1 で対象になった「純漢語」)はかなり少なくなっているが、形態素(=術語の一構成要素)としての漢語(=2.2 で対象になった「漢語を含んだ項目」における漢語形態素)の地位はまだ(かろうじて)健在である、ということを示唆している。同様にアルファベット語については、純アルファベット語が用いられる機会は純漢語よりも多くなっているものの、形態素としてみた場合にはまだ漢語と同じくらいの水準であることを意味している。

### 3 アルファベット語の増加と漢語の減少について

アルファベット語の増加は、外来語の供出元である英語自体の変化もある程度反映しているものと思われる。つまり、英語の体系内において、単純に語を連ねた複合語よりも、各単語の頭文字を組み合わせた頭字語(acronym)が増えており、日本語におけるアルファベット語の増加は、借用を通して英語の状況を反映したにすぎない、という推測も否定することはできないだろう(ただし、たとえば「ODA」を日本語に取り入れる際に、アルファベット語「ODA」として借用するか、あるいは漢語を用いて「政府開発援助」という造語をおこなうかは、あくまで日本語での問題である)。英語において頭字語がどの程度増えているのかは、今後の課題したい。

また、アルファベット語は目で見ただけで日本語が読めない人にも意味が伝わる可能性が高いので、「国際的了解度」がカタカナ語に比べて高いと言える。この点が好まれてアルファベット語が増えている、と考えることもできる。

また漢語については、(少なくとも)コンピューター関連術語として利用される機会は今後減ることが予想される。なお上記では数値を示さなかったが、「和語を含んだ項目」の割合は、各年度を通して数%台以下である。漢語の利用率が和語などに低くなってしまうか

どうかは未知数であるが、このままでは今後の「復権」は難しいであろう。

### 4 カタカナ語に対する意識

ここでは視点を変えて、外来語全般に対する一般人の認識について考えてみよう。まず、文化庁がおこなった世論調査の結果を紹介する。

あなたは、日ごろ読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語を使っている場合が多いと感じることが、よくありますか、たまにはありますか、それとも、多いと感じることはありますか。

よくある	51.6%
たまにはある	32.2
多いと感じることはない	13.8
分からぬ	2.3

(文化庁(2000))

あなたは、新聞やテレビに出てくるカタカナ語の意味が分からなくて困りますか。

よくある	17.1%
時々ある	37.5
たまにある	34.6
ない	10.2

(文化庁(1997))

この結果からも、外来語を過度に使用することは、一般人の視点からは問題が多いことが見て取れる。

### 5 まとめに代えて

漢語や和語による造語は、個々の状況で程度の差はあるが、外来語の借用よりも一手間必要である。

たとえば『現代用語の基礎知識』(1985)では、cybernetics にあたる日本語として「サイ

「バネティクス」と「人工頭脳学」というものとが掲げられている。ここで、漢語を用いた「人工頭脳学」という術語を新造するのにあたっては、cybernetics の意味する内容をきちんと把握しておくことが不可欠である。もし内容を把握せずに造語をおこなったとしたら、それは「誤訳」になる可能性が大であろう。一方カタカナ語で「サイバネティクス」という形で借用するには、cybernetics の内容をきちんと把握しておくことは、必ずしも要求されない。つまり外来語の借用であれば、すでに造語されている外国語（おもに英語）の音形を、日本語の音韻体系に合う形でカタカナ語として取り入れればすむからであり、これは新語の「メーカー」にとっては手軽な方法である。

また外来語の中でもアルファベット語の借用に関しては、「英語の音形をカタカナに直す」という手間すら必要がない。たとえば cybernetics を日本語に取り入れる際に、カタカナ語であれば「サイバネティクス」と「サイバネティックス」という表記のどちらがふさわしいか、などといったことを「悩む」こともあるだろう。しかしアルファベット語で「ODA」ということばを借用する際には、そのような苦労はない。

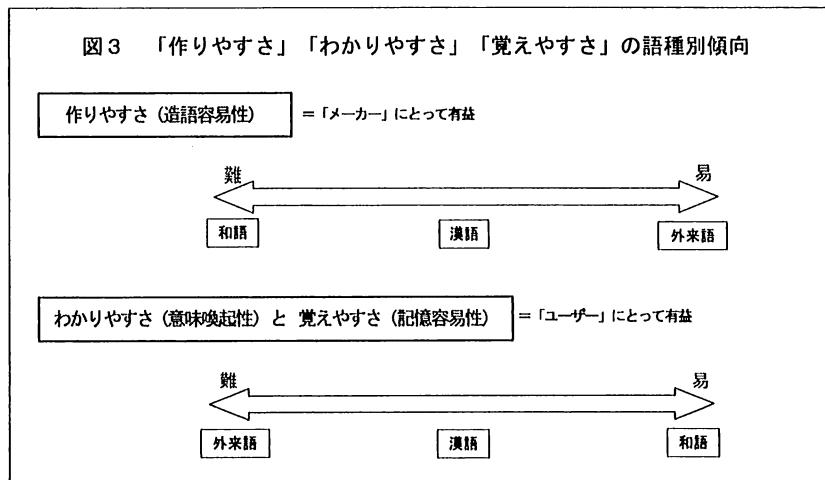
世界の情報交換が英語中心でおこなわれている現状では、漢語や和語を用いる面倒な造語法よりも、外来語（主に英語）の借用が多くなるのはしかたないことである（これはおそらく日本語だけにかぎった問題ではないだろう。今後の課題としたい）。また、漢語や和語による造語を考えたり、またうまく考え出したとしてもそれが「定訳」として定着するのを待っているだけの時間的余裕がなかつたりするくらいに、情報交換の速度が早まっていると考えることもできよう。

しかし、外来語の借用というものは、（あえて外来語を用いて表現すると）ユーザー・フレンドリーなものなのだろうか。

和語や漢語による造語は、外来語の借用に比べて一手間必要であることはさきほど述べた。しかしこれらの語形が造語されると、和語や漢語による語形は、一般に「わかりやすさ（意味喚起性）」の面で外来語に勝る。また、その語形を記憶しようとする際にも、一般に和語や漢語によるもののほうが比較的容易である（ただし英語に詳しい人にとってはこのかぎりではない）。また、一方で漢字の「書き取りの難しさ」も考慮に入れておく必要があるだろう。

このことをまとめると、図3のようになる。

図3 「作りやすさ」「わかりやすさ」「覚えやすさ」の語種別傾向



本稿で考察の対象としたのはコンピュータ一関連術語であり、これは「専門用語」の一

種としての性格も帶びている。専門用語のありかたとしては、ある語形とある概念とがき

ちゃんと一対一対応を成していればひとまず最低必要条件はクリアーされていると言える。その語形の形成に関して、どういった語種の形態素を利用するか、あるいは外来要素を借用するか、などといったことは二の次だ、というのが実情であろう。

ただし専門用語の中には、将来「一般用語」として社会に広まる可能性をもつものもある。造語をおこなう立場にある者としては、その語が一般用語として社会に広まったときのこととも念頭においておく（つまり専門用語のヘビーユーザーのみならず一般ユーザーのこととも考えておく）必要があるのではないか。ある語が専門用語としてのみ流通している間は、どんなにわかりにくい（=語形からの意味喚起性が低い）ものであってもかまわない。しかし一般用語になる可能性のあるものについては、和語や漢語を用いた、第二の「一般向け語形」も考えておくことが必要だと筆者は考える。一般向けの語形を考えるのは専門家の仕事ではなくマスコミのすることだ、という意見があるかもしれない。しかしそのマスコミにかかる者として恥を忍んで弱音を吐かせていただくと、現代のように各領域の専門化が進んだ状況では、マスコミ側の努力だけでこういったことを進めてゆくのにはおのずと限界がある。ぜひ「造語の専門家」の方々のご理解をいただけると幸いである。

## 参考文献

- 井上史雄(2001)『日本語は生き残れるか 経済言語学の視点から』PHP新書
- 国立国語研究所 (1981)『専門語の諸問題』秀英出版
- 塩田雄大(1997)「テレビと専門用語」『日本語学』第16巻第2号 1997.2 明治書院
- 塩田雄大(1999)「日本・韓国・中国の専門用語－日本語とはどのくらい似ているか－」『国文学解釈と鑑賞』第64巻1号 1999.1 至文堂
- SHIODA, Takehiro (2002) Changes in the Etymological type of New Terminology

in Japanese - The Decrease of Sino-Japanese and Increase of Alphabetical Terms - . *Proceedings of Workshop on International Standards of Terminology and Language Resource Management*, Held in conjunction with the LREC2002, Las Palmas.

文化庁(1997)『国語に関する世論調査』大蔵省印刷局

文化庁(2000)『平成11年度 国語に関する世論調査』大蔵省印刷局

宮島達夫(1967)「現代語いの形成」『国立国語研究所論集3 ことばの研究』秀英出版

## 著者紹介

### 塩田 雄大

筑波大学大学院地域研究研究科修士課程修了。  
NHK放送文化研究所放送研究部放送用語班  
研究員。  
社会言語学・語彙論を中心に研究。  
E-mail: [siodath@hotmail.com](mailto:siodath@hotmail.com)